

民俗博物館だより

Vol. 27 No. 2

2001. 1. 15



▲秋祭りの子供相撲 (川西町結崎)

目次

[奈良県立民俗博物館開館25周年を迎えて]

- 創設25周年に寄せて..... 1
- 開館25周年に寄せて..... 2
- くらしの風景—写真資料による郷土の民俗25年—..... 3

[研究ノート]

- 盂蘭盆における精霊を迎え・送る伝承習俗について..... 5

- 編集後記..... 7

創設25周年に寄せて

平山敏治郎

戦後ほうはいとして高まった地方文化振興の波にのって、各地に民俗資料を蒐集展示する施設や古民家を移築保存する企画がおこなわれ、奈良県でもここ大和郡山市に県立の民俗博物館を建て、これに隣接して県下各地の典型的な民家を集めた。これがつい近年のこととと思っていたが、すでに創設25年に及んでいる。

そのはじめに「期待される民俗博物館」の短い紹介文を「奈良県観光」216号に寄せたので、その順調な充実生長が何にもまして嬉しい。

そのころ一緒に発足したお仲間には、専門家でない公務員が担当したところでは、どのようにしたらよいかに迷い滞った施設もあったし、また窮余の策をめぐらせたこともあった。館内にイロリを設け、爐辺で老媪が児童を集めてむかし話をかたる場を造った。その語り口は方言を混じえてほおえましかったが、よくよくみると老媪は碧眼であった。市中のデパートメント・ストアから古いマネキン人形を譲り受けたという。別のところでは同じように女性の仕事ぶりを見せる場面で、着ている紺がすりの仕事着がナント左前。多分若い女性の職員が手伝って、自分たちの洋装の着付から、何の不思議もなく作ったものでもあろうか。

同じ館だったかと思うが、和紙の原料として楮こうぞを蒸す大きな桶に、すでに皮を剥いた白木の楮を立てていた。折角の努力だ、せめて見る者の目に入る側だけでも黒木を立てておいてほしかった。

そのほか米俵がなくて米袋を置いたり、洗濯板の刻み目が直線だった古いものの代りに、戦後に改良された弧形のものを並べたりした。中でも驚いたのは、江戸時代の商家の店頭を復元して、下段が四玉のそろばんを並べたのを見たことである。少し注意していればめったに間違わないですんだものと思っ

たことである。常日ごろ民俗資料館では稀少価値のものばかりでなく、日常平凡な暮らしの道具類を揃えておいてほしいものと思っている。米俵などの稲ワラ製品、仕事着など紺木綿や麻布などである。

この県立博物館の創設に先立って、当時の奥田知事以下の理事者と、末永雅雄先生をはじめ何人かの有識者との懇談会があった。会場に入る前に末永先生は、今日はボクが種々発言して構想を聞き出すと洩らしておられたが、イザとなると贅辞を述べられるばかり。たまりかねてつい僭越ながら質問を重ねてしまった。それで展示資料は購入でなく、すべて県下からの好意の寄贈を立前とすることが明らかになり、やがて展示の場は床面の段差をなくし、奇矯を避けて利便を第一とすることにも及んだ、民具蒐集にも数々の思い出話がある。民家の誘致にも原則があったのだろう。これは専門の委員さんにお聞きしたい。

創設して25年、歴代の館員がわけても学芸員諸君の努力で、今日活力のある施設となっている。その前途は明るいと確信している。
(元大阪市立大学教授・文学博士・当館運営協議会委員)



▲ウルシ採集用具（西吉野村大日川）[県指定民俗文化財]

開館25周年に寄せて

木村博一

はじめて民俗博物館を訪ねたのは、開館の明るく春だったか、日差しの暖かな午後であった。「緑と太陽の心のふるさと」というのにふさわしい空間に思えた。博物館の展示も予期以上、「よく集まったなあ」との印象を持ったのを憶い出す。

それから10年余りして1987年（昭和62）、運営協議会委員の委嘱を受けた。その年の特別展が、「明治・大正・昭和生活資料展」だったのが記憶の片隅に残っている。民俗博物館とのかかわりが深くなったのは、そのときからである。

'92年（平成4）秋のこと、企画文化課の肝いりで、大和民俗公園整備計画委員会なるものがつくられたことがあった。民俗部会の代表として私が参加した。建築部会からは岡田英男さんだったか、ほかに4、5人という小じんまりしたものだった。コンサルタント会社の資料が用意されていて、かなり熱心に討議がかわされた覚えがあるが、来園者を増やすにはどうしたらよいか、ということに議論が傾きがちなのが、私には不満であった。博物館が民俗公園の中核であるべきこと、博物館の施設が貧弱なうえ（たとえば特別展を開くスペースがない）収蔵庫が手狭になってきているので、児童広場のあたりに新しい博物館をつくることを主張、某委員とともに里山の保存・整備の重要性を説いたことを覚えている。お隣の「少年自然の家」や近くの「子供の森」と連携して、野外リクリエーションの場としての機能を高めるべきだ、というような意見のあったことも記憶にある。

しかし、この委員会は、討議を集約しないまま、なぜか3回で打ち切りになり、報告書が作成されたことも聞いていない。一体どうなったのだろう、いまもなんだか割切れない気持である。

この前後私は、和歌山市立博物館の非常勤館長の職にあった。もともと予算が少ないうえ、バブル崩壊後は減らされるいっぽう、これが悩みの種であった。本館も事情は同じ、

やりくりが一苦勞にみえた。にもかかわらず、事業は順調にすすめられてきた。とりわけ学芸員の努力に負うところが大きかったはずである。かねて、無形の伝承文化の映像化がすすめられていたが、このほど作成されたビデオ資料が249に達していると聞いて驚いた。立派な大仕事である。学芸員のみなさんは、少ない人数でほんとうによくやっていると思う。

和歌山市立博物館に在任中、いま一つ難儀に思ったのは、入館者数によって館の活動が評価されがちなことであった。予算折衝のときなどに、あらわにそれが出て困惑させられた。その点、本館の場合もご多分に漏れないようである。しかし、博物館の活動は幅が広く、本館についてみても、民俗資料の調査・収集・整理はもとより、展示事業や教育普及活動など多岐にわたり、その上研究にも取り組む任務を持つ。博物館は、社会教育施設であるとともに研究施設でもある。たんに入館者数の多寡のみによって評価されてはならないのである。

その多面的な活動領域を顧みて、かねて私の気にかかっていることに、本館の学芸員が少なすぎるということがある。さきにもふれたように少ない人数でよくがんばってくれているのだが、それに甘えてはいけなと思う。本館の発展のために、せめてもう一人か二人、学芸員を増やしてもらえないものだろうか——運営協議会委員の一人として、私の切なる願いである。

本館は、広大な民俗公園と一体になっているユニークな博物館であり、公園内には県内各地域の代表的な民家が移築復元されている。その点に思いをいたして将来を考えるならば、野外リクリエーションの場としての機能を高めることよりは、野外博物館ないしクラフトパークを構想すべきであろう。

民俗博物館のいっそうの発展を祈ってやまない。
(奈良教育大学名誉教授・当館運営協議会委員)

開館25周年展（平成12年10月7日～平成13年3月4日）

くらしの風景 一写真資料による郷土の民俗25年一

大宮守人

1. はじめに

奈良県立民俗博物館は、昭和49年11月10日に開館しました。

多くの皆さまの温かいご支援、ご協力のもとに活動が続け、25年を経過したひとつの区切りとして、今回、当館が収録した写真資料による展示を企画いたしました。

景観、生業、祭礼年中行事など、当館が折々の調査活動等の中で蓄積してきたものの一部です。

一見、何の変哲もない風景やいとなみに思われるそれらの写真の中に、重要な語りかけがあると私たちは考えています。

世の中は世代を重ねるごとに変化し流動を繰り返すものです。伝統的な暮らしぶりを後世に伝えることを目的に記録された写真も、改めてみると、その時点における「今」が確実に反映しています。しかし一方、その底流に絶えず流れるもの、時代を越えて受け伝えられてゆくべき不変のものもまた、あるのではないのでしょうか。

第二次大戦後の混乱から昭和30年代の高度成長期を経て今日までのおよそ50年の間に、日本人のくらしはかつて経験をしたことのないほどの激しい変化の波にさらされました。これこそが当館設立の契機ともなりました。

各地に残る様々な伝承は、急速に失われようとしています。

当館ではこれからも、私たち自身の足もとの歴史像を豊かにし、未来に役立つデータベースとなるよう、民俗資料の収集保存に力を注いでゆきたいと考えています。

2. 展示の視点～出品写真の一例から～

■成人式（写真1）180×270cm 昭和59年6月撮影

田原本町鍵の「蛇巻」の光景を大パネルに伸ばしたもので置県100年記念展「子供の世界」コーナーで使用したものです。この行事は、奈良盆地中南部の農村で5月乃至は6月

初旬、端午節供の頃を中心に行われる農耕予祝儀礼、「野神祭り」の一つです。

稲藁と麦藁で作った大蛇を象る大綱を担ぎ、1年間のうちに祝い事のあった家々を祝福に廻るもので、鍵の村では子供組の行事として受け伝えて来ました。

大和棟の民家のある路地を頭持ちと呼ばれる数え年17歳の少年達（高校生）を先頭に行きます。頭は約350把の藁を使い180kgほどありますが、これでもだいぶ軽くなったそうで、昔は1反藁（約1000把）で作ったといいます。重い荷を背負い、懸命に先頭をゆく若者の前傾姿勢に対して、後部を受け持つ年少の子供達の、まるでこれと綱引きをするような姿勢をカメラは捉えています。

この行事は、運行途中、子供たちが持っている綱で、行き合った人や仲間同士を巻き込んで暴れるので「蛇巻」とよばれますが、時として、後ろの子供が綱をひっぱりたり電信柱にこれを結びつけて蛇の前進自体を邪魔します。先頭の若者はこれを抑え、或いは嗜めながら進行に努めるのです。彼らには行事の費用調達から行事の運営全般、祝儀の分配までの全権が任されており、この行事を無事務め終ると子供組を卒業し、青年の仲間入りが許されます。いわば一人前として力量が試される通過儀礼なのです。農村落共同体のシステムの中で生まれ、子供達を取り巻く社会そのものを学びの場として、未来を託すにふさわしい若者の姿を象徴してきたこの祭りは、様々な周辺環境の変化により今後どのように展開してゆくのでしょうか。

奈良盆地の伝統的な集落景観の中で、社会生活として機能してきた年中行事や祭りの数々。激変の時代といわれる中、様々な変革の目標がこうした伝統的システムと対局にあるのではなく、その良さを生かす方向であってほしいと願わずにはられません。

1. 成人式 (田原本町鍵の蛇巻き)



昭和59年6月撮影
(解説は本文「展示の視点」参照)

2. 水口まつり みなくち



水口に松とツツジを立て苗代の無事を祈る。
伝統的な水苗代の風景も珍しくなった。
大和郡山市東明寺 昭和52年撮影

3. 石置き屋根の民家



石置き屋根にスバル板の民家はこの地域の特色。今これらの屋根はトタン葺きに変わっている。

吉野郡十津川村上葛川

昭和49年撮影

4. 子供相撲



氏神糸井神社の秋祭りに際し、
当屋宅での子供相撲。
川西町結崎 昭和61年撮影

5. 奈良盆地農家のダイドコロ (居間)



板戸や神棚、提灯箱は伝統的な
農家のダイドコロのしつらえ。
昭和49年撮影

盂蘭盆における精霊を迎え・送る伝承習俗について

—通常の盂蘭盆習俗と違った伝承習俗のある山添村峰寺と都祁村荻の場合を中心に—

奥野義雄

現在までの盂蘭盆習俗の調査で、大雑把に現行の盂蘭盆の諸習俗について、一般的には以下のように提示することができるであろう。

毎年8月13日から15日の間、盂蘭盆の時期として人びとの間では、先祖の精霊＝オショウライ（オショライともいう）を迎え、送る習俗が伝承されている。

通常の盂蘭盆の習俗は、8月13日の夕方に先祖の精霊を迎え、15日の夕方に送る。精霊を迎えるときには、迎え火＝迎えタイマツを焚く。また、精霊を送るときには、送り火＝送りタイマツを焚く。この迎え火・送り火のタイマツの数は、地域によって異なるが、一般的には1本か、2本であり、家の側で焚く。

このタイマツの素材の変遷については、別稿で述べたので、ここでは割愛する（本誌No.74とNo.76に掲載）が、現行の迎え火・送り火の習俗でのタイマツの素材は、主にイナワラである。このイナワラからもっと簡略化されているところ（農家）もある。

このことはともかく、13日の夕方に迎え火を焚いて、先祖の精霊を迎えたときには、里芋（ドロイモともいう）またはハスの葉に盛った季節の成り物（キュウリ、ナスビ、トマト、ササゲ、ほか）を供える（ここでは、詳しく述べないが、新仏やガキ＝ムエン仏にも同じ物を供える）。

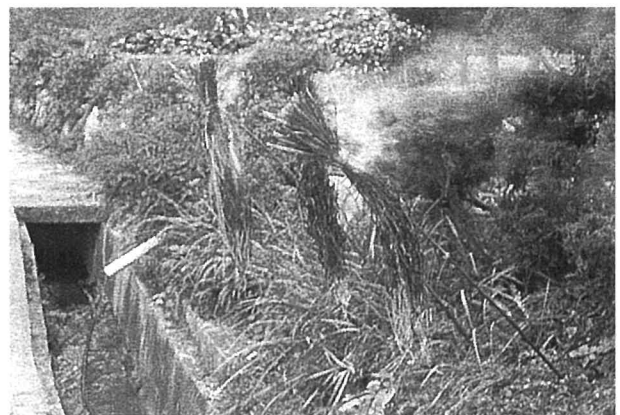
そして、迎えて、送るまでの間、先祖の精

霊に朝・昼・夕・夜には、食事を供える。地域によっては、朝食と昼食の間、および昼食と夕食の間に、オヤツ（間食のこと）を供える習俗がある。

14日の夕方（夜）か、15日の夕方（朝に精霊の棚を片付ける）には、送り火を焚いて先祖の精霊を送る。

では、山添村峰寺の村の盂蘭盆の諸習俗では、どのように現在おこなわれているのかを、次に若干紹介しよう。

峰寺の村では、8月13日の夕刻に、先祖の精霊を迎える。このとき迎え火のタイマツは家の側で3本焚く。先祖の精霊を迎え入ってから、ドロイモとも呼ぶ里芋の葉（ハスの葉は使わない）に季節の成り物（キュウリ、ナスビ、トマト、ササゲ、ほか）を盛ったものと、柿の葉に盛ったダンゴ（オチツキダンゴと呼ぶ）とオチャトウ（お茶湯）を供える。翌日、14日は、一日食べ物のお供えをする。そして、15日の夕方には、送り火のタイマツを焚いて、先祖の精霊を送る。



▲ 3本の迎え火（送り火）のタイマツを焚く（山添村峰寺）

峰寺の村のお盆＝盂蘭盆の諸習俗について概観してきたが、この村では、迎え火・送り火ともに、タイマツが3本である。隣接する村での迎え火・送り火のタイマツの数は、ほとんどが2本であるのに対して、峰寺の村では昔から3本のタイマツを焚いてきたという。なぜ3本のタイマツを焚くのかは不詳であるが、先代、先々代から受け継がれてきた習俗伝承であることは、伝承の聴取りで確かである。

ここでは、詳しく述べないが、峰寺の村や近隣の村でおこなわれている柿の葉に供物を盛る習俗についても、「どうしてこのようなことをおこなうのか」は伝承から明らかにし難い。

このように山添村峰寺の村では、盂蘭盆習俗の中でも迎え火・送り火の習俗は、隣接する村々とは違いをみせ、この習俗を伝承し続けている。

一方、都祁村荻の村でも、一般の盂蘭盆習俗とは一寸違った習俗伝承を持つ農家がある。この農家を便宜上Iさん宅と呼んでおくことにする。

このIさん宅を含めた荻の村での現行のお盆＝盂蘭盆の諸習俗を、次に概観していくことにしよう。

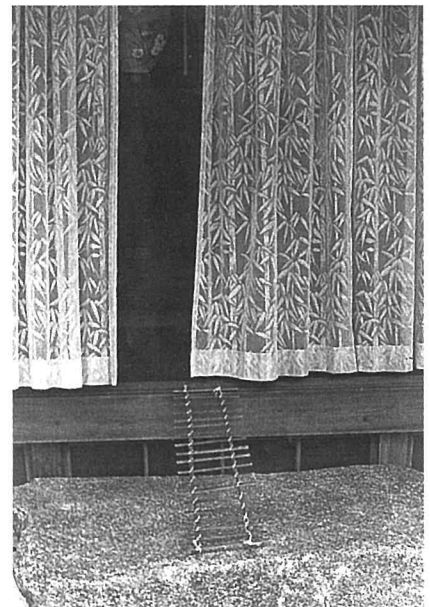
荻の村では、8月13日の夕方に先祖の精霊を迎える。先祖の精霊を迎えるときに、迎え火のタイマツを2本道に面した家の入口近くで焚いて、仏壇の前に拵えた棚へ精霊を迎え入れて、安置する。先祖の精霊を迎えると、里芋（ドロイモともいう）の葉に成り物（キュウリ、ナスビ、トマト、ササゲ、ほか）を盛って供える。また、先祖代々の数のダンゴ（オチツキダンゴとかオチツキモチと呼ぶ）を柿

の葉に盛って供える。

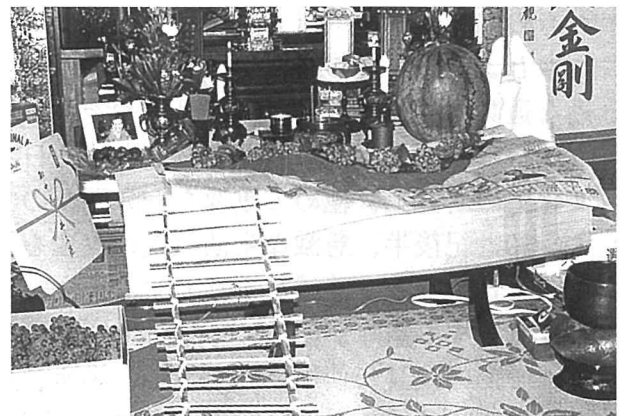
翌日、14日は朝から夜になるまでの間、朝食・昼食・夕食・夜食を供える。これらの食事の料理を供え終わってから、先祖の精霊を祀っていた棚の祭具や供物などを片付けて、夜に先祖の精霊を送る。迎えたときと同様に、家の入口近くで、タイマツを2本焚いて先祖の精霊を送る（農家によっては、15日に送るところもある）。

荻の村の盂蘭盆の諸習俗を垣間見てきたが、同村のIさん宅でも8月13日から14日までの二日の間、先祖の精霊を祀る。そして、先祖の精霊を迎え、送るときに焚くタイマツ（家の入口近くで各2本）や供え物や朝・昼・夕・夜の食事を供える習俗は、村のそれぞれの農家と同じである。

ただ、Iさん宅の先祖の精霊を迎えて、送る習俗で、村の各農家と一寸違う習俗を伝承し続けているのである。それは、13



▼▲先祖の精霊の棚までの梯子（都祁村荻）



日の夕方に先祖の精霊を迎えるのに、仏壇のある部屋の軒先の踏み石から軒縁（畳の間）まで竹で造った梯子を掛け、さらに畳の間に拵えた先祖代々の位牌を安置している（畳から）棚まで竹で造った梯子が掛けられている。この習俗は、Iさん宅で代々受け継がれてきた伝承習俗であるという。この習俗が、なぜおこなわれているのかは、Iさん宅でも分からないらしい。

盂蘭盆習俗で梯子（素材はオガラか、竹）を掛けるのは、初盆を迎える新仏の棚のみで



▲迎え火タイムツ（都祁村針ヶ別所）

ある（初盆での新仏を祀る習俗についても、ここでは割愛する）。

現段階では、山添村峰寺の村と都祁村荻のIさん宅の、一般の盂蘭盆習俗と一寸違う伝承習俗において、その形成時期やこのような習俗がなぜおこなわれているのかという意図は、『大和無足人日記』（平山敏治郎校訂）や『諸国風俗問状答』などの文献史料からも明確にしがたいので、ここでは一般の盂蘭盆と一寸違う伝承習俗の紹介に留めておくことにしたい。（2000年9月17日稿了）



▲ガキダナ（都祁村針ヶ別所）

編集後記 [開館25周年を迎えて]

20世紀の後半から始まった奈良県立民俗博物館の仕事。それは、郷土の風俗・慣習及びこれに伴う生活用具で、「生活の推移の理解に欠くことのできない資料」の収集・保存・活用と研究を行なうことから始まりました。民俗博物館の基本をなす一部分の、民俗資料収集に関しては、その量、質共に充実してきていることは報告できると思います。このことは、県民の協力なくしては成り立たなかったものでしょう。

もとより、日常の必要から作り出された身近な道具である民俗資料（民具）やそれに伴う伝承は、庶民生活の基本であるため、日本文化史の研究上、極めて重要な一分野なのです。20世紀後半、急激な生活様式の改変を経過し、日を追って消滅しようとする民俗文化財を蒐集する意味がそこに存在しています。一個の民具が使用された土地、場所、使

用者、その村人の生活感情に関して深く考慮する努力を怠って文化の発展と創造は存在しないと思うのです。今後、蒐集した民俗資料からは、21世紀を迎えた私たちに、様々な意味を語りかけてくれるであろうと思います。

今日、奈良県立民俗博物館において、課題は山積していますが、25年を経たいま思いを新たにしていこうとしたいと思います。そのためには、多くの協力なしでは成り立ちません。県民が誇れる民俗博物館には、まだまだ長い年月を要します。これから先も、皆さまがたに育てていただくため、暖かく、見守りながら声援を送って頂ければありがたいのです。

末尾になりましたが、長年に渡り民俗博物館への御指導をして下さっています平山敏治郎先生、木村博一先生から「25周年に寄せて」の暖かい文藻を頂き心よりお礼申し上げます。（浦西）